

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月5日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820008

研究課題名（和文）フロイトの「情動」概念、特に「不安」概念の構成にみる生物学主義的言説とその諸相

研究課題名（英文）Sigmund Freud's Biologism with Reference to the Structure of his Concept of Affect, especially of Anxiety

研究代表者

佐藤 朋子 (SATO TOMOKO)

東京大学・大学院総合文化研究科・学術研究員

研究者番号：70613876

研究成果の概要（和文）：本研究は、精神分析の創始者フロイトによる生物学の知見の援用や生物学からの語の借用に注目し、彼独自の心理学的言説、なかでも情動の問題の錬成におけるそれらの意義を検討し、その一部を明らかにした。とくに痛み、喪、不安などの不快な情動について後期の彼が行った身体的次元の問いの提起がトラウマをめぐる思索の深化を伴っていることを明確にした。また二〇世紀ヨーロッパ思想史の観点から彼の情動概念の重要性を指摘した。

研究成果の概要（英文）：The major interest of our study lies in Sigmund Freud's recourse to the biology of his time and his borrowed terms from this science. We highlight the role they play in the construction of his psychological discourse, especially in the elaboration of the problem of affect. We discover that the later Freud's posing, in corporeal terms, of the question of unpleasurable affects, such as pain, mourning, and anxiety, is correlated with a deeper and more accurate appreciation of the problem of trauma. We also point out the importance that his concept of affect can have in the context of twentieth-century European philosophy.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：20世紀、精神分析、フロイト、デリダ、メタ心理学、生物学、情動、トラウマ

1. 研究開始当初の背景

(1) 精神分析の創始者フロイトについてしばしばいわれる「生物学主義」とは、生物学から術語を借用したり、「生物学」という語

を用いたりするときに彼がとっているだろう何らかの態度を問題にするものである。従来の研究や議論の大半（代表的な論者としてラランシュやサロウェイ）は、それを、19

世紀末から 20 世紀初頭における生物学の知見に依拠する態度へと還元してきた。

(2) フロイトの「情動」概念については研究の相対的な遅れが認められる。まず、彼が初期や中期の仕事で錬成した理論については比較的研究が進んでいるものの、1920 年以降に提示した諸命題にかんする体系的な研究はこれまでほとんど行われていない。また、不安、痛み、喪=悲しみ、よるべなさといったもろもろの不快な情動を個別的に主題とした研究は相当数あるものの、それらの相互の分節に注目した研究はほとんどない。

(3) 本研究の研究代表者はこれまでのフロイト研究において、実践から理論構築までの手続きを重視した観点から、メタ心理学と呼ばれるフロイト独自の言説の錬成と特徴を検討してきた。その検討のなかで、彼の理論的言説がつきあたる限界と生物学の用語を援用する契機とのあいだに相関性がみられること、また、「情動」の問題をめぐる議論のなかでその相関性がとくに顕著に現れることに気がついた。

2. 研究の目的

(1) 精神分析の領野でフロイトが「情動」をめぐる展開した議論のなかに断片的な形で見いだされる生物学主義的なもろもろの言辭を、一貫性を保持しながら、また、自身に固有なくつかの重要な問い（なかでも、「系統発生」の観念を経由することにもとづく、歴史性に関わる問い）を提起しながら展開する言説として再構成する。

(2) 痛み、喪、不安、よるべなさといった不快を帯びた情動のそれぞれとそれらの相互関係についてフロイトが練り上げた表象を明確にする。また、そうした表象の構築において身体の問題が立てられるかぎりにおいて、それらの情動の問題が、快との対立においてのみとえられた不快の問題に還元されえないことを示す。

(3) フロイトの生物学主義が 1920 年に転回を迎えたことを明らかにし、それに引き続いて起きた理論的な再編成の諸相を後期のフロイトの著作のうちで明確にする。

(4) フロイト（とくに後期）の生物学主義

の全般的かつ肯定的な再評価を行い、20 世紀にさまざまな理論的文脈において利用されてきた精神分析的な身体論の基礎づけに向けて途を拓く。

3. 研究の方法

(1) フロイトの 1880 年代から 1938 年までの著作の精密な読解を行う。とくに、メタ心理学的と一般に呼ばれている言説が展開されているテキストを中心にとりあげる。

(2) 思想史の文脈においてフロイトの情動概念がもちうる意義についての考察で、20 世紀のフランスの思想家、なかでもジャック・デリダのフロイト読解を検討する。

(3) フロイトおよびデリダの著作のほか、二次文献として、英語・フランス語・ドイツ語・日本語圏の研究文献をもちいる。

4. 研究成果

(1) フロイトによる 1920 年の「死の欲動」の概念の導入に伴う理論的再編成を、メタ心理学の中軸をなす三つの観点（局所論的、経済論的、力動論的観点）のすべてにおいて浮き彫りにした。とくに、それ以降のフロイトによる「自我」と「エス」と「外界」（最晩年のフロイトの言葉を借りるならば、自我の最末端において身体が代表するものとしてのそれ）の関係の定式化が、その概念の導入の直接的な帰結であることを明らかにした。また、その定式化における「トラウマ」の問題の決定的な重要性を明確にした。

(2) 『夢解釈』（1900 年）の不安理論と、『制止、症状、不安』（1926 年）のそれとのあいだにみられる差異を具体的に指摘した。とくに、不安の発生の理論が後者のテキストにおいて根本的に修正されたことを確認した。また、その修正と同時に、不安発生の問題がトラウマの問題と接続されたことを明確にした。

(3) 上記（1）、（2）の成果をより一般的に解釈することを通じて、生物学主義が 1920 年に転回を迎えたことを明らかにした。

(4) フロイトの言説における痛みの問題の

重要性と位置づけを具体的に明らかにした。とくに、身体的な痛みと心的な痛み的一致という問題意識をフロイトが著作を通じて維持していたことを、1880年代のコカイン研究と同時期のヒステリー性疼痛の研究、1915年の論文「喪とメランコリー」、1926年発表の著作『制止、症状、不安』を中心的に取り上げながら論証した。また、『制止、症状、不安』において、身体的な痛みと心的な痛みの両方に応用しうる、準メタ心理学的と形容すべき「痛み」の表象が錬成されたことを明らかにした。

(5) 上記(2)と、(4)の副次的な成果(喪=悲しみが痛みを満たしているという事態を表象する概念装置が『制止、症状、不安』において錬成されたことの確認)とにより、1920年以降のトラウマの問題の再規定と、身体的な次元の問いを含意するものとしてのもろもろの不快な情動(不安、喪=悲しみ、痛み)の理論の再錬成とが相関していることを明らかにした。

(6) 上記(5)の結果として、後期のフロイトの、「精神生活のうちに沈殿した、きわめて古いトラウマ的体験」としての「情動」観における系統発生問いを追究するための研究上の指針を得た。

(7) 「不安」にかかわる身体の問題をさらに研究するために、オイディプス・コンプレクスと去勢コンプレクスの分節を再考するという今後の研究の指針を得た。

(8) デリダが初期から晩年までのテキスト(たとえば、「フロイトとエクリチュールの舞台」(1967年)、『絵葉書』(1980年)、『アーカイブの病』(1995年)、2000年代の対談)において取り組んできたフロイト読解の特徴を明らかにした。とくに彼の読解において、フロイト由来の「情動」の問いが他者論における射程を与えられたことを明らかにした

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

(1) 佐藤朋子、情動、あるいは生けるもの他なるものへの関係. ジャック・デリダによるフロイト読解の一側面、フランス哲学・

思想研究、査読無、17号、2012年、93

(2) Tomoko SATO、Une breve note sur la douleur dans le corpus freudien Jouissance et souffrance (ed. Marcus Coelen, Claire Nioche, Beatriz Santos)、査読無、Campagne Premiere、2013、69-81

(3) Tomoko SATO、The Question of the Family in the Biopolitics of Chimeras、Future of Bioethics: International Dialogues from the GABEX conference (ed. Akira Akabayashi)、査読有、Oxford University Press、2014、ページ数未定

[学会発表] (計5件)

(1) 佐藤朋子、情動、あるいは生けるもの他なるものへの関係. ジャック・デリダによるフロイト読解の一側面、日仏哲学会秋季大会、2011年9月11日、大阪大学豊中キャンパス (大阪府)

(2) 佐藤朋子、「死の欲動」の導入の歴史的・理論的文脈. フロイト『快原理の彼岸』の構成と主要主題、日本ラカン協会第12回ワークショップ、2011年10月23日、専修大学神田校舎 (東京都)

(3) Tomoko Sato、Travail douloureux de deuil. Problème économique et topique de la douleur chez Freud、4th Annual Meeting of the International Society of Psychoanalysis and Philosophy、2011年12月7日、パリ第七大学 (フランス・パリ)

(4) Tomoko Sato、Jouissance archaïque ou une hypothèse freudienne pour l'instabilité de l'amour、UTCP Symposium《Amour et jouissance》、2012年2月6日、東京大学駒場キャンパス (東京都)

(5) 佐藤朋子、喪失と象徴化. 3.11後の喪の作業を考える、GCOE-UTCP ファイナル・シンポジウム2012「カタストロフィーと共生の哲学」、2012年3月5日、東京大学駒場キャンパス (東京都)

[その他]

ホームページ等

http://jglobal.jst.go.jp/detail.php?JGLOBAL_ID=200901047092562357

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤朋子 (SATO TOMOKO)

東京大学・大学院総合文化研究科・学術研究員

研究者番号：70613876